

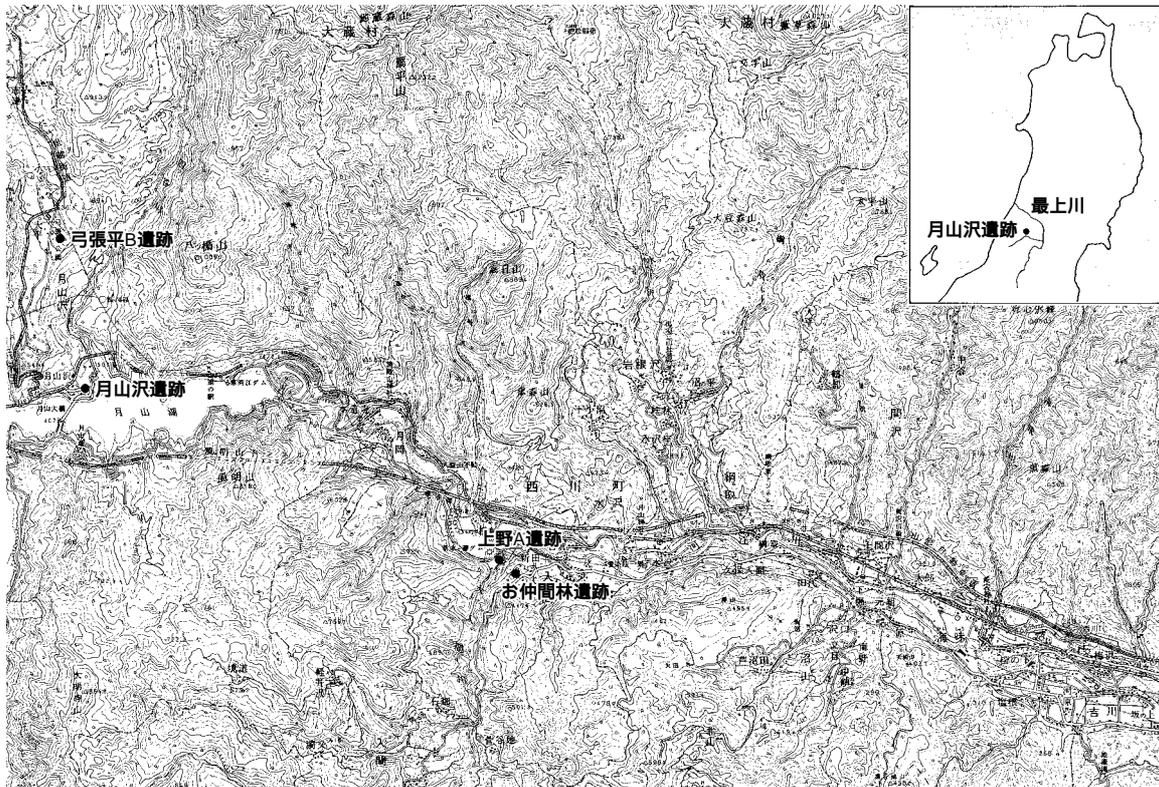
山形県西川町月山沢遺跡出土石器群の検討

石井 浩 幸

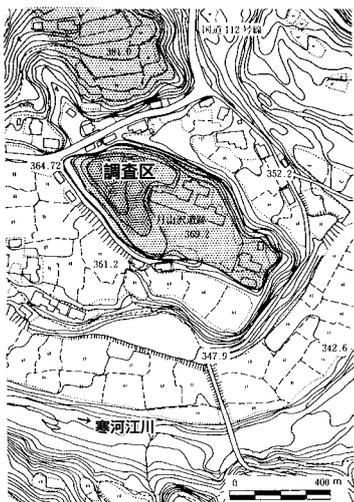
1 はじめに

東北地方における旧石器時代の石器群については、これまで加藤 稔によって資料の集積と研究が進められてきた¹⁾。細石刃文化研究においては加藤 稔が1991年(平成2)にまとめられた「東北地方の細石刃核」『山形県立博物館研究報告12』が、これまで東北地方から出土した細石刃核を分類し東北日本の細石刃文化の系統や年代についてまとめられた画期的な研究として位置づけられる。この中で加藤が「最上川流域に限っても、従来から北海道方面で分類されてきた細石刃核の諸型式に該当しない資料がある。……」と示唆されたとおり、東北地方、特に最上川流域に限って言えば、「複合」或いは「融合」と言える細石刃生産技術の変異の一端を散見することができる。さらに石器群全体の組成について捉えるならば、尖頭器やナイフ形石器の共伴関係など不明確

な点が残りに、北海道や関東で見られる細石刃石器群諸型式と同じテーブル上で検討する上で数々の問題が残されているのも確かである。石井は、1993年(平成4)野辺山でおこなわれたシンポジウムでも同様な指摘受け、再度資料の検討が求められた²⁾。つまり、まず細石刃核の諸型式の吟味と組成する石器群の真偽を明らかにする必要があると認識するに至ったのである。その後、1994年青森県大平山元 遺跡の2次調査で尖頭器と湧別技法関連資料の出土もあり、山形県内での状況把握を進める必要を感じていた。1998年には西川町上野A遺跡の発掘調査を担当された慶應義塾大学の阿部祥人先生から、削片剥離の特徴を持つ尖頭器が検出されていることを聞き、注目するところとなった³⁾。以上の経緯を経て、石井は細石刃石器群と尖頭器石器群の共伴関係を明らかにすべく両者の出土が報じられている月山沢遺跡の出土資料の持つ重要性を見出し、検討を行うことにした。さらに東



第1図 月山沢遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 月山沢遺跡周辺の地形

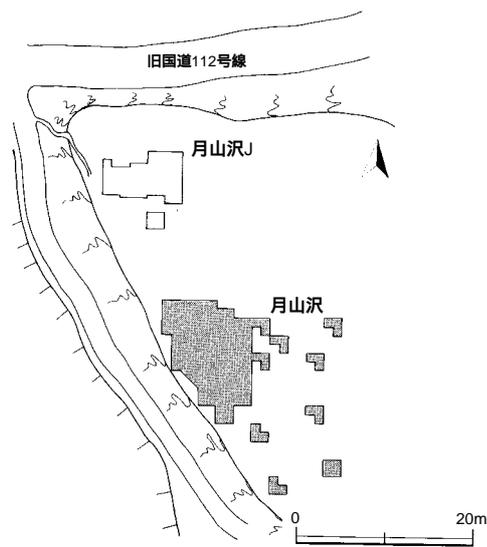
北地方では、研究史の初期から層位的な区分が困難なこともあり、尖頭器文化・細石刃文化の編年や構造等を明確に設定することが困難な状況にあった。いきおい細石刃主体、尖頭器主体・両者共存といった出土状態から、とかく先入観や経験・個人的な年代観・他地域との比較といった手法により分類比較となることが多くなりがちである。特に示準となる火山灰の希薄さと火山灰も含めた堆積土の少ない山形県域では石器群の区分は、遺跡内での上下関係やブロックや母岩別分布といった二次的な手法での分類術に強いられたことになり、確証性を高める努力が求められている。遺跡間の石器群の比較分析となれば、形態論や型式論・経験的知識による研究が主とならざるをえない。このような研究手法や環境的な制約を考慮に入れつつ、本稿では1980年に槍先形尖頭器と細石刃・削片類が出土した山形県西川町月山沢遺跡の石器群に焦点を当て、石器群の出土状況と組成について検討を試みるものである。

2 月山沢遺跡の概要

(1) 位置

出羽三山と呼ばれる月山・湯殿山・羽黒山周辺は最上川をはじめ、幾筋もの河川により開析され、その流域には数多くの旧石器時代遺跡が散在している。寒河江川流域には金谷原遺跡・弓張平B遺跡・お仲間林遺跡・上野A遺跡そして今回紹介する月山沢遺跡があり、峰を越えたところには学史的にも有名な越中山遺跡群がある。

月山沢遺跡は、西村山郡西川町大字月山沢地内に所在



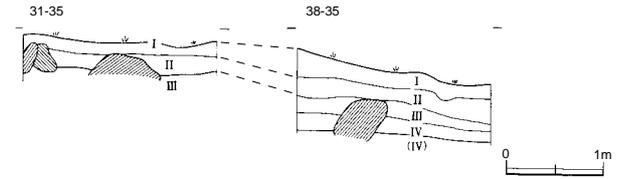
第3図 月山沢遺跡の調査区位置図

し、月山山系の一つである姥ヶ岳（標高1600）の南麓に細く伸びる台地上の丘陵の南端部に位置し一帯は寒河江川の大きく蛇行する部分によって限られている。遺跡は溶岩や火山砕屑物を基底とする開析台地の先端部に位置している(第2図)。地目は畑地及び小学校の敷地となっていた。

(2) 遺跡の発見と調査経緯

月山沢遺跡は、昭和初期に月山沢小学校造成の際に石片などが発見され、戦後には町立月山沢小・中学校の造成がくり返されるなかで尖頭器や土器片などが採集されてきた。1960年(昭和35)の「山形県遺跡地名表」にも登録され、地元の研究者や学生らによって注目するところとなり、寒河江川流域の旧石器時代遺跡の探査を続けられていた宇野修平や荒木利見は何度か遺跡を訪れ、表面調査を行っている。1973年(昭和48)加藤稔と上野秀一は月山沢遺跡から採集されている尖頭器や細石刃核を紹介し、石器群の性格等について考察を加えられた⁴⁾。

1969年(昭和44)、国の新全国総合計画の発表にからんで、総合多目的ダム(寒河江ダム)の建設計画が打ち出された。1977年(昭和52)に具体化し1979年(昭和54)には山形県教育委員会によって発掘調査が実施された。調査の成果は翌年に調査報告書にまとめられている⁵⁾。発掘調査での出土資料は旧石器時代のものと縄文時代早期のもので、石器を主として総数約330点を数える資料が出土した。旧石器時代の石器群は槍先形尖頭器を主な組成とする石器群で、1980年当時は類例も少なく、研究者の注目するところとなった。



- 第 Ⅰ層（黒色土） 表土に相当する。耕作等の削平の影響をうけ、厚さがまちまちである。腐食質土。根などの攪乱あり。8 ～ 30 。石器・土器等を含む。攪乱を受けている。
- 第 Ⅱ層（暗黄褐色シルト質粘土層）色調は茶褐色に近く、やや粘性があり、微砂質である。火山噴出物の風化した小れき（3 ～ 5 ）を含む。全体的に締まりが弱くやわらかい。石器等を含む。
- 第 Ⅲ層（黄褐色土）砂質粘土層。火山噴出物で風化れき中位のもの（5 ～ 10 ）を多量に含み粘性があり、若干のパミスを含む。層に比して締まりが強い。第 Ⅱ層との漸移層と見られる。石器等少量含む。
- 第 Ⅳ層（黄褐色土）砂質粘土層。火山噴出物の風化れきで大形のもの（10 以上）を含み、巨れきの底面となっている。締まりも強く堅い。無遺物層。～ Ⅲ層の境目は、波状に凹凸している。

第 4 図 月山沢遺跡の層序図

県教育委員会の調査に前後して寒河江ダム周辺やお仲間林遺跡周辺を探索していた会田容弘らは県教育委員会の調査地点に隣接する地点で石器を採集できる場所があったため、小範囲な調査を実施している。調査地区を J 地点と区分し、この時の調査の概要と出土資料については鈴木 隆によって報告されている⁶⁾。寒河江川流域は旧石器時代の遺跡が集中する地域で、月山沢遺跡の北方約 5 の地点には、弓張平 B 遺跡・弓張平 H 遺跡など槍先形尖頭器石器群を出土した遺跡が点在し、寒河江川下流には、慶應義塾大学考古学研究室により継続的に調査されてきた上野 A 遺跡やお仲間林遺跡がある。月山沢遺跡は調査終了後、寒河江ダムの造成に伴い削平、消滅し、今は人工的な湖岸に造成されている。

（3）包含層について

遺跡は寒河江川が形成した河岸段丘上（低位 群）に位置し、放射能炭素年代測定によると低位段丘 群は約 1 万年～ 3 万年前に形成された（米地 1973）と考えられている。低位面群の直接の年代資料としては、約 4 下流の久保入間北岸の低位段丘面の堆積層より 10,350 ± 14 Cy・B・P の木片が得られており（阿子島・米地 1986）、月山沢遺跡のある低位段丘面の年代は 1 万年以前と予想されている。遺跡がのる段丘は、北側の山地斜面に発する支谷の崖錐に覆われていると考えられる緩斜面の部分が広くて、寒河江川本流の河床面起源と考えられる平坦面は南側の川よりの部分に限られる。本流突端部に位置を占めている本遺跡の地形をややマクロに見ると四ツ谷

表 1 出土石器の集計

器 種	月山沢遺跡	月山沢 J 遺跡	計
尖頭器	10	7	17
搔器 削器	11	10	21
彫刻刀形石器	1	2	3
石刃核	1	不明	1
石刃	2	12	14
細石刃	1	0	1
削片	2	1	3
スキー状削片	2	0	2
ヘラ状石器	2	8	10
石鏃	3	不明	3
石錐	1	不明	1
剥片・碎片	296	255	551
総 計	330	287	617

川と寒河江川に挟まれる段丘のステージ部分をなし、学校敷地から墓地部分にかけてはやや高い小丘を成していたものと考えられる。その後学校敷地等の造成によって平坦に整地されたとみられる。県教育委員会の調査地点は段丘小丘の中央部から河辺にかけて緩やかに高さが減じている部分にあたる。

遺跡は以前、墓地や畑地に利用されたこともあって、表土からの攪乱が著しく、堆積層は土色や土質、構成物から 4 層に区分される（第 4 図）。堆積する各層は、東南方向の傾斜に沿って漸次厚く堆積していて、流れ込み堆積の影響を見せる。石器は第 Ⅱ層下部から第 Ⅲ層下部にかけて上下幅をもって包含されている。一部 Ⅲ層上位まで出土するが、分布の中心は Ⅲ層中位にある。Ⅲ層以下に存在する巨大な礫は、上方からの落石が堆積したもので徐々に礫を覆い隠すように土砂が堆積したとみられる。その上に火山性の二次堆積物が堆積、併せて石器が残された。堆積物は褐色で水成作用を受け、やわらかく丸く小さいものが多い。調査では土色の変化等による遺構を確認していないが、石器のまとまり（ブロック）を確認している。Ⅲ層は粘質シルトに近い土性で、安定した状況にはなく、崩落礫や流水等により改変・移動が伺える。Ⅲ層の上面付近で石器の出土が見られなくなることから、本来の包含層は Ⅲ層中として把握することができる。出土遺物は縄文時代に属するものと旧石器時代に属するものがあるが両者は層位的に混在する状況で検出されている。Ⅲ層以下の礫層は寒河江川の氾濫原に相当し、遺物包含層の下部にあたる Ⅲ層上部が形成された頃以後、この段丘は完全に離水して安定した状況にあったと考えられる。

3 石器群の検討

月山沢遺跡の発掘調査で得られた遺物は330点程であり、旧石器時代のものとして縄文時代のものに分けられる。縄文時代の遺物は土器片5点と石鏃・石錐・石筥などで少ない。土器の観察から時期は縄文時代早期(三戸式)に併行する沈線文土器である。今回は縄文時代の石器は検討の対象から除外した。しかし、以前から調査区一帯からは荒木利見や会田容弘らによって、数多くの石器が採集・発掘されているので、これらの資料については一部、検討の対象とした。そして隣接する月山沢J遺跡も大きく遺跡の中に含まれるものと考えられるため検討資料の対象とした。旧石器時代の石器群は大きく槍先形尖頭器の一群と削片系石器群に関係するものとグルーピングされるため、まずこれら二つの石器群について検討する。

(1) 槍先形尖頭器石器群 (第5図)

槍先形尖頭器は破損品も含めて18点(内1点採集品)である。石材は一部を除いてすべて良質の珪質頁岩を利用している。完形品は4点だけで他は破損品である。槍先形尖頭器の規模から見ると大きいもので長さ175、短いもので65を測る。幅は長さに対して細身を示す。大きさの規格性はみられないものの幅25~35に集中することは着柄につながり注目すべき点である。形態からみるといわゆる木葉形尖頭器と呼ばれる一群にあたる。先端に該当する部分は基部より細身に鋭利に加工される傾向がある(第5図1・2・4・8・9など)。器体の大小は素材の大小や加工の精度にも影響を受けるため、同一形態の変異として理解すべきかもしれない。

尖頭器製作途中で、破損したがゆえに遺跡内に残されたと考えられるものがある。破損の大小や部位の差は見られるものの、いずれも製作段階に破損したと見られる。この中で第5図の2・3・6はもともとの素材剥離面を残している。素材剥離面は尖頭器の長軸方向の剥離というよりも斜め方向が多く、もともとの素材が縦長の剥片ばかりではなく多様な剥片や原石を利用していたためと考えられる。また、尖頭器を子細に観察すると、破損後、再加工されている尖頭器があることに気づく。第5図7・11などは尖頭部が斜め方向に破損したためか、周辺に再度調整加工を施し尖頭器に仕上げているのがわ

かる。10は舌部のように突出している部分があるが全体の形状からみると不自然で、おそらくこの尖頭器も破損後、再加工して仕上げられたと考えたい。ほかに尖頭器製作時に派生する扇形の調整剥片・破片が数多くある。この他に月山沢J遺跡の発掘資料に槍先形尖頭器が6点あるが、第5図4・9の2点の完形の槍先形尖頭器をみると県で調査した区域で出土した資料との形態的な類似性を読み取ることが可能である⁷⁾。

(2) 搔器類 (第6図)

搔器類は、縄文時代のものも含めて12点出土している。この中で、母岩やブロックとの位置から旧石器時代のものと思われるものを観察した。

17・18・24・25は石刃状剥片を素材としている。17・24は先端部周辺に加工を巡らす。25は弧状に刃部を作出する。20・21は背面に周辺からの剥離痕がみられる。この種の搔器は細石刃核の両面加工ブランク製作に付随して生産される剥片を利用することがある⁸⁾。19は黒曜石製の両面加工のラウンドスクレイパーである。気泡が少なく良質の黒曜石である。1点であるが21は切断面から1条の槌状剥離が入り彫刻刀と考えられる。北方系細石刃石器群に伴うことの多い荒屋型彫刻刀や角二山型搔器は見られない。月山沢J遺跡からは、他に両面加工石器製作により派生する剥片を利用した搔器や石筥様のものもある。

(3) 石核 (第6図23)

石刃を生産したとみられる石核が1点出土している。石刃剥離が進行し相当消費された状態で廃棄されている。同一母岩とみられる搔器が存在している(第6図18)ことは、素材としての石刃生産が行われていたことを示唆している。隣接する月山沢J遺跡でも石刃がまとまって出土している。

(4) 削片系石器群に関連する石器群 (第7図)

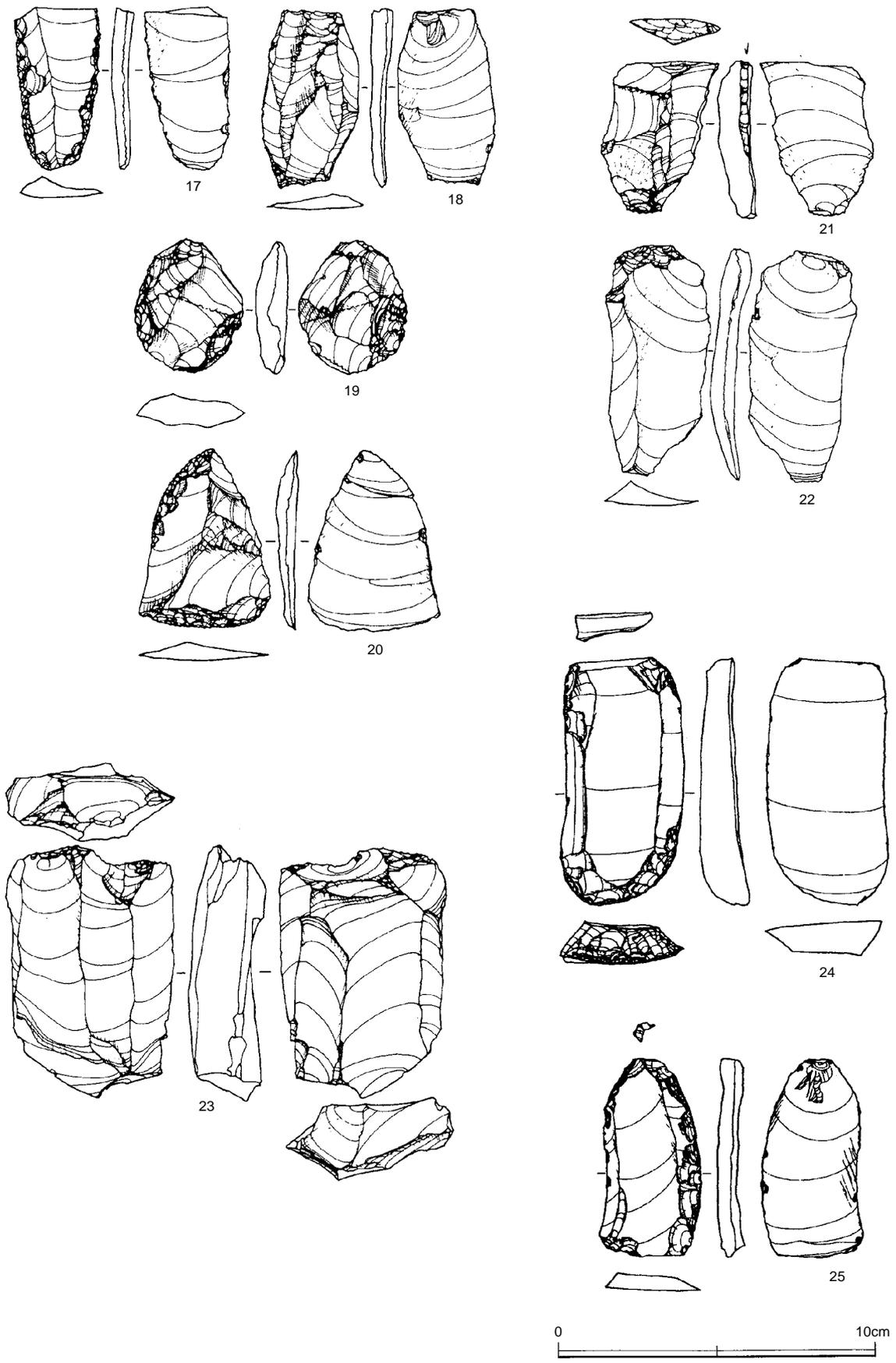
細石刃生産に関わるとみられる資料が存在する。削片や細石刃および採集品に細石刃核?がある。これらの石器群に関して検討する。

削片 (ファーストスポール)

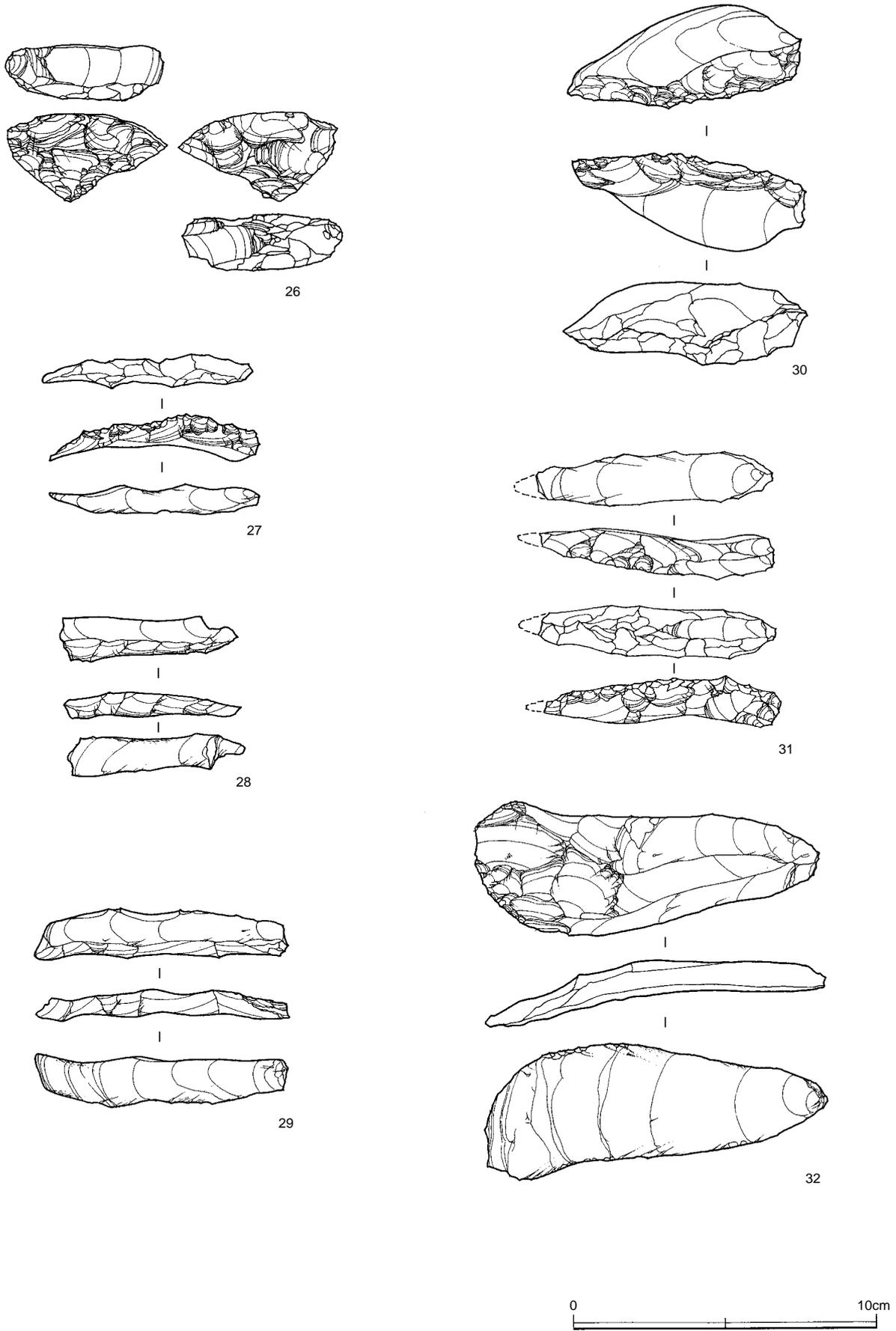
2点出土した。第7図27は長さ69、幅8で石材は珪質頁岩である。両側辺ともに大小の剥離が加えられて峻が形作られている。両面加工石器の尖頭部から剥取されたことが伺える。30も峻付き削片(ファーストスポー



第5図 月山沢遺跡出土の石器群(1)
 (内、4・6・9・13・15は月山沢J遺跡)



第6図 月山沢遺跡出の石器群(2)



第7図 月山沢遺跡出土の石器群 (3)

ル)である。両面加工石器の末端まで剥取されたものではなく、器体中央付近で終止したようである。また、打点から右方向にねじれた感じで剥離されている。よって甲板面はねじれ甲板面となったことと想定される。会田容弘氏の採集資料にファーストスポールがある(第7図31)。この削片は背面に小さい長軸方向の削片痕がみられることから、2回目以降の削片とみられる。

2次削片(スキー状スポール)

スキー状スポールは3点出土している。材質を見る限りでは2点は同一母岩の可能性が高い。29は長さ85 幅16 厚さ8 を測る。背面腹面ともに右方向からの剥離痕を残す。両側辺には両面加工石器の器面調整の一部が認められる。幅が16 であることから18~20 の厚さをもつ両面加工石器であったと思われる。28は断面三角形のスキー状スポールであり、先端と基部を破損している。側辺に調整痕がみられる。背面腹面ともに右方向からの剥離による。32は2回目以降の削片と思われる。頁岩製で全長86 幅17 を計る。削片剥取は2回以上行われており、剥離面の観察からは、削痕や光沢等は確認できなかった。

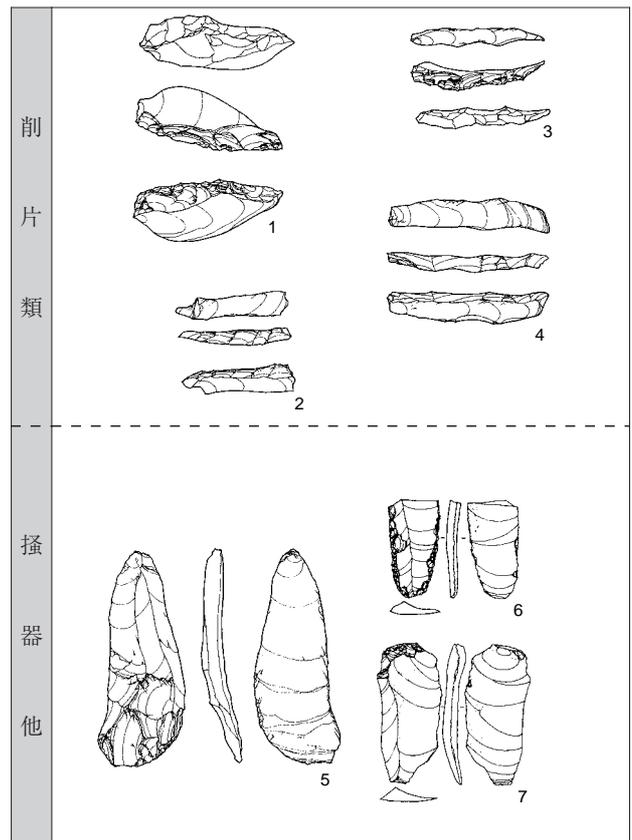
1994年、山形県教育委員会文化財課により弓張平高原一帯の分布調査が行われ、その折、スキー状スポールを採集している(1995『分布調査報告書20』山形県教育委員会)。採集された削片は、一端に細石刃剥離の痕跡を残すもので、打面再生のための削片とみられる。打面と作業面の相対的位置関係を調整するための削片剥離と考えられる(渋谷孝雄氏のご教示による)。

細石刃?

1点出土している。破損しているため全体の形態や大きさは不明である。幅は5 である。珪質頁岩製。

細石刃核?(第7図26)

昭和39年、月山沢小・中学校の校地を整地した際、佐藤 敬によって多数の石器とともに細石刃核と思われるものが採集された。この資料は昭和46年(1971)上野秀一によって紹介された⁹⁾。その後、加藤稔・上野秀一(1973)及び加藤稔他(1982)でも取り上げられ、湧別技法による細石刃核として紹介されるにいった。佐藤により採集されたこの細石刃核は玉髓製の厚手の両面加工石器を母型としたもので削片系細石刃核の範疇で理解できる資料である。甲板面は長軸方向の剥離で形成されて



第8図 母岩を共有する石器類

おり、削片の剥離によるものと考え。細石刃剥離の作業面と思われる面は、甲板面から53度の角度で幅広の剥離がおこなわれ、さらに狭い剥離が1条入っている。県内で玉髓製の細石刃核は本資料だけとなるが、小国町湯の花遺跡で玉髓製の舟底形石器が発見されている¹⁰⁾。遠くなるが北海道や岡山県恩原遺跡でもメノウ製の細石刃核の出土が報じられている¹¹⁾。

月山沢遺跡から出土した細石刃関連資料は、削片の存在から両面加工品をもとに細石刃核を準備していることを想定した。スキー状削片から細石刃核の打面長は100 、打面幅は18 以上あることがわかる。しかし、資料数が少ないことや接合資料が見られないことから如何なる生産段階を構成しているかは判然としない。現時点では、資料から想定される製作技術は、両面加工品の分割や削片剥取の変化等が考えられるため、大枠での削片系石器生産のグループに含まれるものと理解し、従来の「湧別技法」や「大平山元技法」¹²⁾の範疇で理解できるかは予測できない。瞥見するに、この細石刃核と思われる資料の類品が上野A遺跡の彫刻刀類(「上野A遺跡2002」の第25図~27図)の中に見受けられ、全体的に細石刃生産に関連するとして検討したこれらの資料は、尖頭器の未成

品や破損品を副次的に利用した削片剥離作業によっても生成可能であり、一概に細石刃石器群に関わるとは判断できないと補足しておく。

4 分布の検討

(1) ブロックの確認

石器は第 層下部から 層上位にかけて出土し、一部、縄文時代の遺物も出土したが、相対的なレベルの差はない。石器の出土と合わせて斜面上から崩落した巨礫が姿を表している。ブロックはまとまりとして把握できるものの、全体的に散漫な散らばりであり、遺物の大半は後世の攪乱等の影響を受けているものとみられる。攪乱を受けた状態ながら月山沢遺跡ではいくつかの石器のまとまりが捉えられ、任意に6つの集中地点(A～Fブロック)からなる石器分布を設定した(第9図)。個々のブロックは分布の密度や広がり・器種組成に違いがみられる(表-2)。

各ブロックの資料は視覚的にまとまりがみられるものの第 層出土資料の大半は原位置を離れて移動していると考えられ、分布の主体は 層中にあり、ブロック形成は 層～ 層出土資料による。A・Bブロックからは完形の槍先形尖頭器がまとまって出土した。一カ所に完形品が集中した遺存のあり方は、若干の移動を考慮しても『デポ』とか『埋納』施設として議論される状況を示している。また出土した石器群を全体視すると完成された製品の割合が高く、剥片や碎片類が少ない。

発掘調査は調査予定地全域で坪掘りを実施し、遺物の集中した場所を拡張して行っている。他の試掘地点においても若干の石器の出土が見られることは、広い範囲にわたってブロックが形成されていたと考えられる。20m程離れた月山沢J遺跡では、約30 の調査範囲から300点程の石器群が出土した。分布図からは、一部近世の墓壙群によって攪乱されているが東西8mの範囲で大きな分布の集中エリアが読み取ることが可能である。学校敷地の造成時にも多くの石器が出土したとの情報も加味するならば、この小さな張り出した段丘全域が遺跡範囲としてとらえるべきかもしれない。

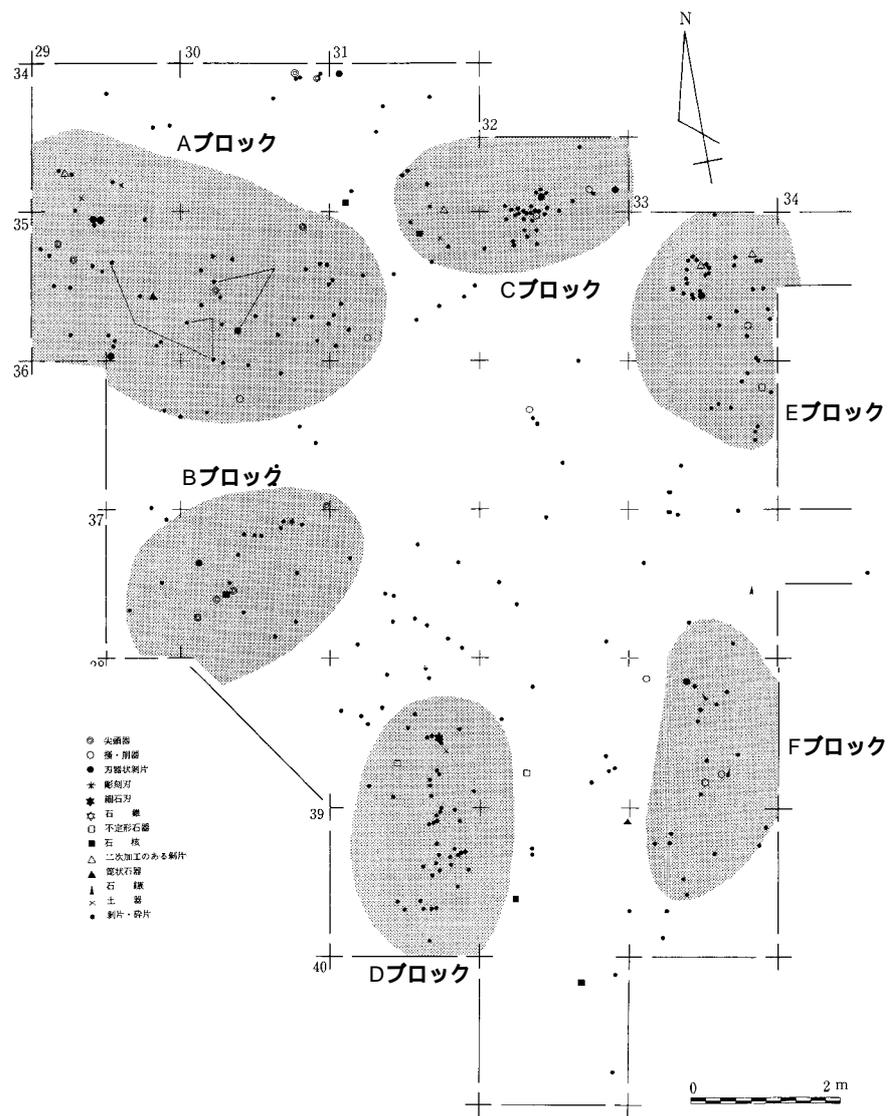
(2) ブロックの性格

ブロックごとの石器組成には器種の片寄りや剥片類の多寡がみられた。AブロックとBブロックはともに槍先

形尖頭器を組成しており、一つのユニットを構成するとみて間違いのないであろう(第9図)。削片系石器群の分布を見るならばAブロックとEブロックに削片があり、Eブロックに細石刃?がみられる。尖頭器と削片系細石刃関連の石器群は排他的な位置関係にはなく、より包括された分布状況を示している。ブロックA・B・C・E・Fは同時性を唱える上で状況的判断が容易でないといえる。

Bブロックの槍先形尖頭器の一括資料は前述したように『デポ』といえる状況を見せている。神子柴遺跡や鳴鹿山鹿遺跡での槍先形尖頭器の出土状況に近似した様子を見せる。デポ遺構の検討を試みている栗島義明(1990)によれば、石器組成のすべてを或いはそれぞれの石器形態が遺跡を単位に偏在しているのではなく、基本的に石槍、石斧という両石器形態のみが限定的に認められるとし、石器が単一の斉一性をおびた生成の背景には特定石器製作者の存在を想定している。そしてデポ類(石器集積)、デポ類(石器埋納)として把握して¹³⁾。月山沢遺跡Bブロックの石器配置状況(第11図)からは若干のレベル差があるものの完形の槍先形尖頭器4点がほぼ向きを同じにしていることから完成された製品の「集積」「配置」等を意識させる。栗島氏の区分するところのデポ類に相当する。月山沢例では、拳大から人頭大の礫が囲むように存在する点、特殊な事例として注目される。

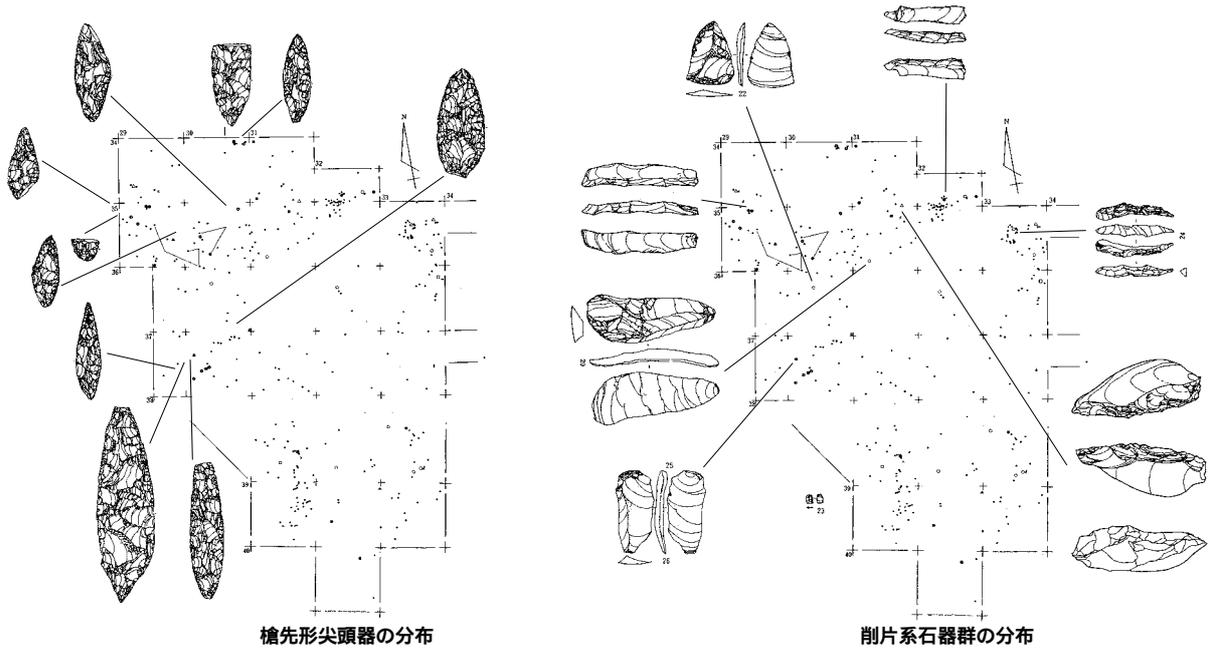
調査区全体を見ると槍先形尖頭器石器群は、完形品の割合が高く、製作時に派生する剥片が少ないこと、搔器など器種がそろっていることなど製作を主とするエリアのイメージは薄いようである。同じ寒河江川流域で、慶應義塾大学考古学研究室(代表 阿部祥人)による上野A遺跡の調査では、小範囲の調査区ながら尖頭器製作時に派生したと思われる夥しい数の剥片・碎片類が重なり合うように出土した(1998 阿部祥人他)状況から察しても月山沢遺跡で確認されたブロックは、石器製作が主活動目的ではないことが推察される。そして細石刃関連の資料については目的物である細石刃がほとんど見られないことなども製作の拠点と判断することは困難であろう。まして槍先形尖頭器のデポ遺構の空間に不自然に混在する点など2つの石器群の遺存状況に差異が伺える。削片系石器群に関しては、他地点に中心部があると考えられるが、このように二つの石器群の機能的な違いは場



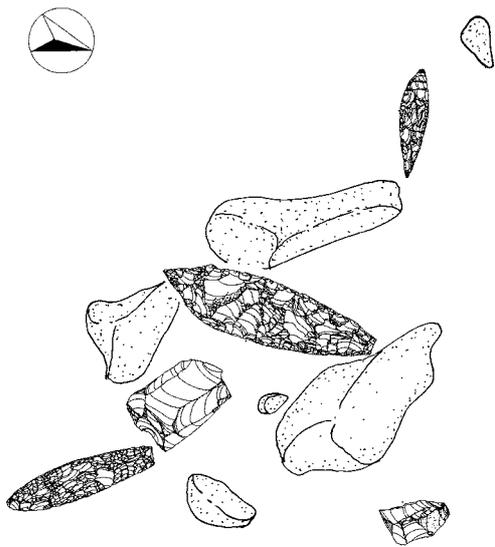
第9図 石器分布とブロックの状況

表2 各ブロックの出土状況

	分布の状況
Aブロック	長径5 短径3 の範囲。4点の槍先形尖頭器と2点の削片が出土。ブロック内で7点ほどの接合関係がある1 離れて槍先形尖頭器2点出土。
Bブロック	長径4 短径3 の範囲 4点の槍先形尖頭器と彫刻刃形石器、石核がまとめて出土。
Cブロック	長径3 短径2 の範囲 搔器、石核が出土。剥片碎片が密集。
Dブロック	長径4 短径3 の範囲 細石刃 調整加工痕のある石器類。
Eブロック	長径3 短径2 の範囲 二次加工のある剥片、石刃状の剥片。
Fブロック	まばらに分布 石鏃2点 搔器2点



第10図 槍先形尖頭器石器群と削片系石器群の分布



第11図 Bブロックの石器配置状況

の利用差を反映するのか、単なる年代差によるものか考慮の余地がある。

以上、槍先形尖頭器と削片系細石刃関連資料は分布を共有しながらも石材や場の機能などの点から積極的に共伴を提唱することはできない。

5 組成と編年の検討

(1) 組成の検討

次に月山沢遺跡出土石器群の組成を検討する。

前述したとおり層位的に石器群の年代を区分すること

は困難であり、分布のまとまりから検討しても有効な情報を得ることができなかった。槍先形尖頭器と削片系細石刃石器群は広く重なり合うように分布が見られるため個々の資料の共伴を判断するにも困難があった。そして、その他の搔器や石刃等の石器についても2つの石器群との組成関係の真偽を判定する状況にない。巨視的にみた石器生産体系から考えてみると、月山沢遺跡では尖頭器生産技術と細石刃生産技術(削片剥離の両面加工石器か)が存在し、それぞれがさらに複数の石器生産にも関わっていると見ている。出土した資料は、それぞれの生産活動や使用行動によって残されたもので、筆者の観察では削片・搔器・彫刻刀に同一母岩の資料を確認している。(第8図) 母岩を共有する資料はスポール・スキー状削片・搔器等・他剥片で構成され、削片剥離の母体となる両面調整加工品(ブランク)の準備にもとなう副次的製品のようにも見える。

このような複合した石器生産技術は、山形県角二山遺跡、新潟県荒屋遺跡でも確認されており、永塚俊司(1996)のいう「連動システム」であり、「モバイルトゥール」(加藤博文1996)としての基盤となっている。出土した槍先形尖頭器の中にも母岩を共有するものがあるのが観察したが槍先形尖頭器と母岩を共有する資料は確認できなかった。結果、分布上は重なりあっても母岩の検討で共伴する確証は得られなかった¹⁴⁾。さて、月山沢遺

跡での問題となっている削片系細石刃石器群と槍先形尖頭器石器群とがあたかも共伴していると捉えられてきたことについては槍先形尖頭器と細石刃との共存関係が課題視されている現在、慎重に対処すべき姿勢が必要となってきた。よって確認した2種の石器群を並視しておき、他遺跡の様相と比較から組成の真偽とその特徴について間接ながら考えざるを得ない状況となっている。

(2) 東北日本の様相

細石刃と槍先形尖頭器の組成の状況について他地域の様相を概観する。北海道では細石刃に槍先形尖頭器や有舌尖頭器が共伴することは以前から知られるところであり、湯の里4遺跡や美利河遺跡等で大型の槍先形尖頭器との伴出が報じられ、細石刃文化の後半、オショロッコ型細石刃核・広郷型細石刃核には有舌尖頭器が出現することは多くの研究者の理解されているところである。ただ、山原敏明(2003)は細石刃文化の後半から終末の石器群が御子柴・長者久保文化と同じ石器群として認識できるかはなお混沌としているとし、安易に参考にすることができないとしている。

東北でも細石刃と槍先形尖頭器の共伴については問題視してきた経緯があるが、明確な形で槍先形尖頭器と細石刃が出土した遺跡は少なく、議論の材料が不足していたと言わなければならない。とりわけ東北全体で細石刃文化の遺跡の調査例がすくないことが議論の停滞をもたらしているようでもある。このような状況の中でも、山形県湯の花遺跡・山屋遺跡・越中山遺跡E地点・越中山遺跡S'地点など尖頭器が採集されたり、少ないながら出土した遺跡はあった。しかし、いずれも採集品や小範囲の調査であり共存の真偽を明確にするものではなかった。現在、槍先形尖頭器と細石刃の追求は東北日本の旧石器文化研究の中でも新たな段階をもたらしつつあり旧知の遺跡においても再確認が必要となっている。

山形県内では朝日村越中山遺跡S'地点からまとまった槍先形尖頭器が出土している。ここはホロカ系細石刃核を出土した越中山遺跡S地点と5mしか離れておらず、また細石刃も出土していることから一つのユニットを構成するものと想定している¹⁵⁾。加藤・石井(1993)はS'地点の包含層を完掘していないこと、全容を理解するには時期尚早としながらも、尖頭器文化の中で細石刃

を見極めようとの見解を示した。同じ越中山遺跡E地点においても発掘資料の槍先形尖頭器と採集品ながら黒曜石製細石刃核があり関心持たれる。月山沢遺跡は削片剥離による細石刃生産技術である点、若干趣を異にするが一つの比較材料となってくる。採集品であるが山形市山寺の所部遺跡からも一次削片と槍先形尖頭器、角二山型搔器が採集されている¹⁶⁾。

青森県大平山元遺跡 b文化層から、削片剥離の尖頭器(大平山元技法A) a文化層からはホロカ系船底形石器と尖頭器の供伴が報告されている。1989年の第2次調査では、第 文化層から槌状剥離をもつ槍先形尖頭器と湧別技法を保持する石器文化の存在を明らかにした¹⁷⁾。大平山元遺跡 b文化層に関しては石刃生産が安定的に行われていることなど月山沢遺跡と類似する部分もある。秋田県秋田市鴨子台遺跡・狸崎B遺跡では、削片系細石刃核と主体とする石器群が出土したが、ここでは槍先形尖頭器は確認されていない¹⁸⁾。福島市学壇遺跡群では槍先形尖頭器と多数の細石刃関連資料が出土している。報告書では多くのブロックから細石刃の出土が確かめられたものの尖頭器の共伴例は少ない、その中で区23号ブロックで細石刃77点と尖頭器が1点出土した。一部欠損しているが同一母岩の剥片碎片が多く出土していること、細石刃と一つのブロックを構成している点から共伴の可能性が高いようである。¹⁹⁾

(3) 中部地方北部の様相から

新潟県域をみると樽口遺跡や大刈野遺跡、正面中島遺跡・荒屋遺跡で尖頭器石器群と細石刃石器群の出土が報じられている。研究史上古くから比較資料とされてきた新潟県中土遺跡、月岡遺跡出土の石器組成をみると、槍先形尖頭器の組成は判然としない²⁰⁾。新潟石器研究会による中土遺跡の検討によっても両者は伴わないとの判断が示された。荒屋遺跡の2次3次調査の報告書では、1点ながら尖頭器の出土が報告されているが、他の器種の出土量から比較して極端に少なく安定して組成していたのか疑問視される。大刈野遺跡について、吉井雅勇(1998)は平面分布だけをみれば両石器群のブロックは分かれ、石材の共有もないため積極的に両者が伴うとする根拠がないという。荒川台遺跡では、非削片系の細石刃生産技術の発見により『荒川台技法』が提唱された。広範囲に調査を広げているものの、調査区内からは槍先形

尖頭器は検出しおらず、組成しないことが理解できる。黒曜石製削片系細石刃核がまとまって出土した新潟県朝日村樽口遺跡では層(A-MS, A-MH文化層)から細石刃核と槍先形尖頭器の伴出が報じられている。A-MH文化層はホロカ系細石刃核を主体とする石器群、A-MS文化層は白滝型細石刃石器群と尖頭器を主体とする石器群を構成する。ただし層位的裏づけはなく、重複するブロックの分布や包含状態からの区分の点、課題が残されている²¹⁾。立木宏明(2003)は先行する真人原遺跡他の尖頭器石器群とのつながりや終末から神子柴系石器群への移行時にあたり、併行関係など未だ未解明部分が多いとし追求の継続を指摘している。

(4) 関東・相模野の様相

関東地方の北方系の細石刃関連遺跡について見るならば、東北産と思われる頁岩を用いた細石刃を出土した埼玉県白草遺跡では数多くの細石刃が見られたものの槍先形尖頭器は出土していない²²⁾。茨城県後野遺跡B地区では破損品ながら尖頭器の出土例があるものの千葉県域での北方系細石刃石器群資料を概観しても、尖頭器の出土例は見当たらない²³⁾。北関東を中心に研究を進めている萩谷千明氏は「火山灰編年により細石刃文化の各石器群の変遷の大まかな枠組みは示されているが、これまで群馬県内で知られたまとまった数量の細石刃石器群は先行するとされる槍先形尖頭器をもつ石器群とは火山灰編年では層位的な前後関係が区分できない。という弱点もある。・・・槍先形尖頭器の後半段階の石器群については南関東での問題と同様、一部併存する可能性がある。」とし、槍先形尖頭器石器群のより詳細な分析の必要性とより良好な火山灰の堆積状況をもつ遺跡の検出が必要と述べている²⁴⁾。

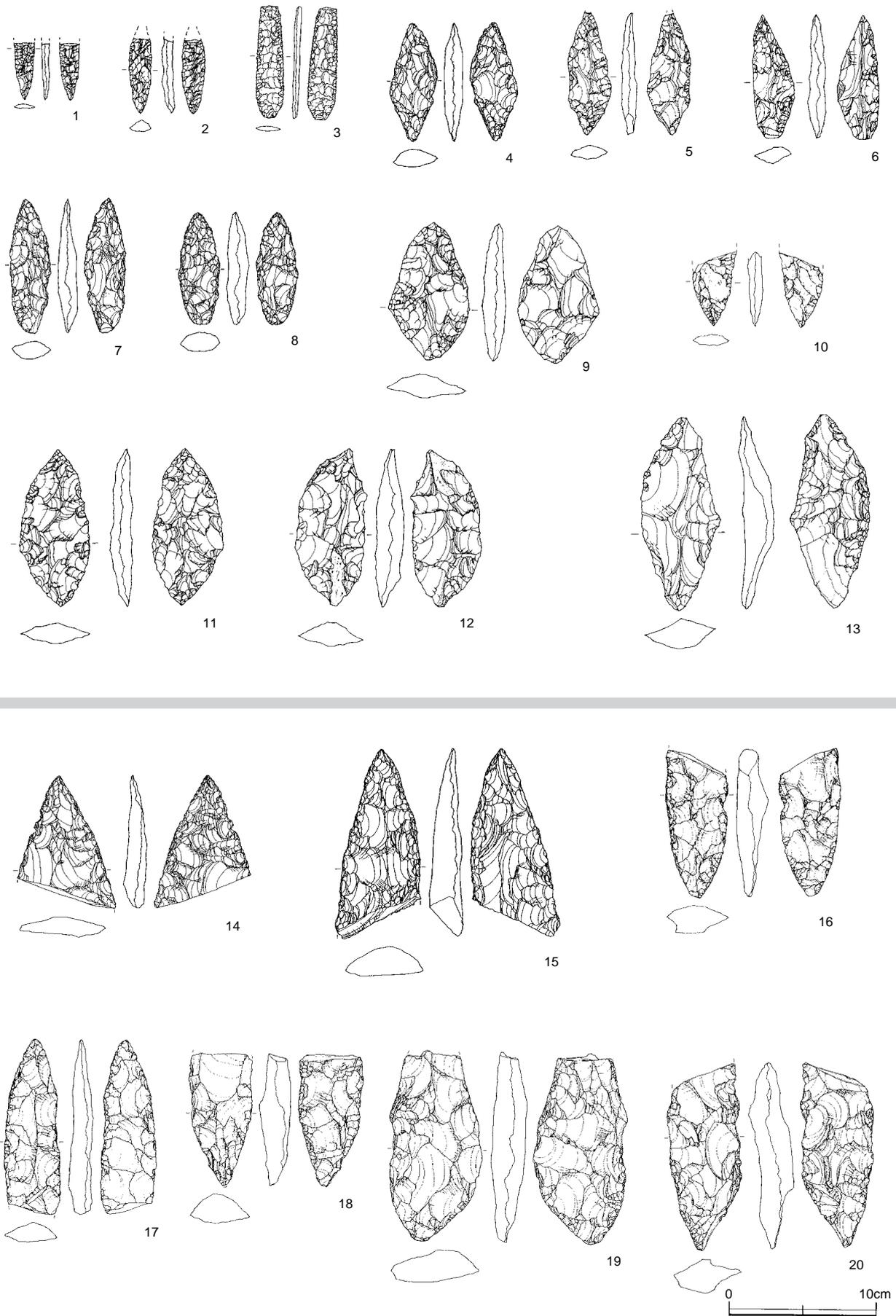
さて、層位的に調査の進んでいる相模野台地に眼を転じれば、相模野の段階には槍先形尖頭器は細石刃の出現・波及によつて狩猟具としての座を追われ、段階の神子柴系石器群の出現によって再登場するまでは技術的消滅する見解(伊藤1988・堤1991・諏訪間1993)、数量は減じながらもある部分では従来から存在した槍先形尖頭器を保持して用いていたとする見解(1989鈴木次郎)や槍先形尖頭器を保持する集団が細石刃技術を受容し段階的に変化したとする見解(鳥立桂1993・白石浩之2003)など活発に議論されている。しかし層位的に段階的把握の

可能な相模野においても依然として結論は出ていない状況にある²⁵⁾。砂田佳弘(1993)の「槍先形尖頭器と細石器との同一遺跡内での共伴関係は、層序や平面・断面分布母岩別資料等の再検討を精緻に実施すれば、悲観的な雰囲気が強まりそう・・・」など状況打開はなお先のことながら、遺跡間の層位的な比較検討から着実に石器群の動態が明らかになってきている。

2003年の神奈川考古学会主催「相模野旧石器到達点」では時間軸としての編年研究の成果を取りまとめつつ、下総台地で削片系の細石刃核と荒屋型彫刻刃が出土している点から相模野との状況的な違いを取り上げ、古利根川以北の北方系細石器が相模野のどの層準に相当するのかわたに明確でないことを示し(白石2003)、湧別技法による細石刃技術と荒屋型彫刻刃持つ集団が相模野台地まで及ばず、終末段階にいたって在地石材による湧別技法による細石刃核がもたらされたとの見通しを示された。今後も北海道から南関東にかけての石器群の動向を捉えつつ、東北日本(山形)の状況については詳細にかつ慎重に研究を進めていく必要がある。

(5) 搔器・彫器等について

搔器・彫器類について見てみると、月山沢遺跡では北方系細石刃石器群に特徴的な「荒屋型彫刻刃」「角二山型搔器」が認められないことがあげられる。加藤学(1998)はこの草形の搔器が、北方系細石刃石器群に特徴的に存在していることを捉え直し、他器種や系統関係を追求していく上で補完的に対応できる要素を備えているとして資料的な価値を認めている。確かに月山沢遺跡には角二山遺跡で認められている形態の搔器や彫刻刀がないことは銘記すべき点である。月山沢では搔器・彫刻刀の素材は石刃や尖頭器製作・細石刃生産の過程で得られる剥片を副次的に利用していることがわかっているが、このような技術構造は角二山遺跡や荒屋遺跡・弓張平B遺跡でも確認されている。月山沢遺跡では、削片類と共通する母岩の搔器・削器を把握しているが、関連して近年、細石刃生産工程が他器種の生産をも担っていることが報告されるようになった。例えば、永塚俊司(1996)は、「細石刃剥離工程と剥片石器の素材剥片生産工程が一連の流れの中で連動している石器製作システム」を連動システムと呼称し、また堤隆(1996)は連動グループ(荒屋、角二山、恩原等)と別動グループ(中ツ原、



第12図 西川町山居遺跡出土の槍先形尖頭器石器群（上段1～13） 寒河江市高松 遺跡出土の槍先形尖頭器石器群（下段14～20）

柳又A)の技術構造を捉え、その背景に石材環境差と技術的伝統差を見通した。同じく加藤博文(1996)は、新道4遺跡や石川1遺跡で得られた両面調整石器の接合資料から石器製作の流れと技術体系の「表現型」を示し、石器生産の総体として見た製作プロセスについて考察された²⁶⁾。阿部祥人(2002)も上野A遺跡の尖頭器石器群について同様な視点からアプローチされた。製作工程の中で生成する様々な段階の尖頭器母型が破損や欠損による再加工を経て、他の器種の生産に変容していく「プロセス」である。不測の事態に対応した技能を保持しているという視点は部分的ながら月山沢遺跡の槍先形尖頭器の再加工の状況にも見ることができる。

石刃類については県教育委員会調査地点から石刃核が出土していることや月山沢J遺跡からも石刃がまとまって出土した状況を考慮するならば、石刃が素材として生産され、石刃利用の搔器類が製作されていた状況が見出されるであろう。尖頭器製作と石刃生産の混在は、西川町上野A遺跡においても看取されるところであり、他遺跡の状況を見据える必要がある。層位やブロックでの区分が容易でない地域的な影響を配慮するならば、より母岩分類や接合といった積極的に証拠を提示していく作業が求められてくる。

(6) 槍先形尖頭器の形態について

次に槍先形尖頭器の形態の面から月山沢遺跡の石器群を考えてみたい。近接する弓張平B遺跡第2文化層の槍先形尖頭器群と比較すると弓張平B遺跡の資料は細身の槍先形尖頭器と有舌尖頭器が主体をなす点、嗜好する形態のイメージに違いが看取できる。筆者は以前、弓張平Bの槍先形尖頭器を細身小形のタイプと大型の3タイプに分類し、舌部が未発達点から有舌尖頭器の初期段階に設定したことがあるが²⁷⁾、月山沢では、明確な舌部の作り出しはみられず、時間的なズレを感じる。また縄文時代草創期にあたる高畠町日向洞窟西地点は大量の槍先形尖頭器と打製石斧・隆起線文土器が出土し話題になったが、縄文時代草創期前半と目される日向洞窟西地点層段階では槍先形尖頭器の出土量の多さに加え、打製石斧・半月形石器・石鏃等が安定して伴出し、石器組成に幅が出てくる。そして槍先形尖頭器の形態についてみれば、明瞭な返しのある有舌尖頭器は見られないものの大小多様な形態の尖頭器が存在する。日向洞窟西地点で

は、隆起線文土器に伴出する石鏃が割合として大きな比重を占める点からしても、弓張平Bや月山沢は日向洞窟西地点より前段階と大まかにとらえられよう。

山形県内陸部の西村山地域では、東北横断自動車道酒田線関連の発掘調査で槍先形尖頭器の出土例が見られ比較資料が増加してきた。寒河江市高瀬山遺跡、高松遺跡・西川町山居遺跡などがそうである。山居遺跡では数多くの槍先形尖頭器未成品・破損品が出土し、槍先形尖頭器は大型から小型そして半月状のものまで百点を越す資料が得られた(第12図)。尖頭器の生産供給地と考えられる。同じく高松遺跡でも、槍先形尖頭器とともに、たくさんの剥片碎片が出土している。細石刃は出土していないが槍先形尖頭器を観察すると形態の大小と広がりがあるものの薄手の槍先形尖頭器を仕上げている様子が伺える²⁸⁾。先述した西川町上野A遺跡においても槍先形尖頭器の接合資料が得られており、貴重な知見を提供している。接合資料の中に削片剥離を行っているものやいわゆる大平山元技法A・Bに類似するような接合資料が存在するようであり興味深い。先にも述べたが月山沢遺跡にみられるスキー状削片に類似する削片が見られる点は考慮すべきことで、月山沢遺跡において細石刃石器群の一群ととらえている資料は、上野A遺跡の削片石器群類似のグループと理解すべき余地があるのかもしれない²⁹⁾。

6 まとめ

月山沢遺跡の石器群について、その組成や分布について検討した。得られた成果をまとめるならば、

槍先形尖頭器石器群と削片系石器群(細石刃?)が存在する。

槍先形尖頭器は、形態的にいわゆる大小の木葉形尖頭器である。

削片系石器群には、削片や細石刃核ブランクなどから削片系「湧別技法」の所産と推測できるものが含まれている。

デポと思われる完形の槍先形尖頭器が配置されたところがある。

層位的に2つの石器群を区分することはできない。

6ヵ所のブロックが見られ、尖頭器と削片系石器群は部分的に重なり分布する。

2つの石器群間で母岩の共有は確認できない。

2つの石器群が共伴する確証は得られない。

細石刃生産に関連するとみられる削片類に類似する資料は、上野A遺跡からも出土している。両面加工石器を利用した削片剥離の可能性がある。

以上に整理できる。焦点の「共存」については、分布上の区分はできないものの母岩の違いから積極的に肯定するだけの条件が整っていないと言える。そして場の機能差や他遺跡事例から鑑みても槍先形尖頭器石器群と削片系石器群は区別して取り上げるべきであろう。そして、これは月山沢遺跡にとどまらず湯の花遺跡や越中山S遺跡、学壇遺跡群など尖頭器が出土している遺跡において同じく留意すべき点である。

ともあれ月山沢遺跡の槍先形尖頭器は形態からみると弓張平B遺跡の有舌尖頭器に近い所に位置づけることが可能であり、細石刃文化か或いはきわめて近い時期と考えたい。現在、東北では量的に安定した形で、槍先形尖頭器と細石刃両者が共存する遺跡がきわめて少なく、共存したとする報告でも単品や1～3点に限られ積極的な共存論に躊躇せざるを得ない。槍先形尖頭器の動向には縄文時代草創期まで継続するとの見解や初期の細石刃石器群には共伴していないことなどから尖頭器から細石刃へと画期的交代劇と評価する見解³⁰⁾など南関東を中心に研究が深められつつあるが、同じ山形県にある角二山遺跡では槍先形尖頭器の出土はなく組成に含まれていない。削片系細石刃核『札骨型』が主体である角二山遺跡の石器組成は「特殊な組成」なのか「一般」なのか調査研究の継続が望まれるのは間違いない。

北方系細石刃石器群を保持する集団の南下を示す細石刃石器群が、関東平野に確認されるようになって注目されてきている中、石器文化研究会主催の第4回交流会において約30箇所の北方系細石刃石器群を出土した遺跡が紹介されたが、これらの北方系細石刃石器群分布の動因として、佐藤宏之(1993)は「石器製作技術の単相性…移動時には細石刃核素材または母材を運搬・携行すればよい。…移動生活における利便性にある。必要な石器装備を単一の製作技術で製作可能なことは行動論上、少数の構成員からなる集団の移動性に著しく有利である。」ことを捉え、定住性獲得の要件を満たしえたと述べられた。同様に加藤博文(1996)は、シカ類などの季節的な移動の行動様式に対応して移動性に富んだ石器装備の集

団が関東方面への流入が、狩猟キャンプ的な規模の小さな遺跡が形成される結果になったとの可能性をとらえ、その背後にモービルツールとして両面調整石器の存在をあげている³¹⁾。関東方面で発見されている北方系細石刃石器群の石材は、東北産の頁岩と考えられており、月山沢遺跡をはじめとする石材産地に位置する遺跡の情報は集団の南下と狩猟採集戦略・定住を考える上で重要な情報源を担っていると見えよう。関連して栗島義明氏の示したデポ遺構が構成される背景としての生産・供給システムを視野に入れる必要も感じる。つまり、石材原産地地域での集中した生産と得られた大量の石器を地域を越えて分配・交換する社会的なシステムである。今後の課題としておきたい。

本稿では月山沢遺跡出土石器群の検討を通して、細石刃・削片系関連の石器群と槍先形尖頭器石器群の共伴関係や年代観等について追及してみた。月山沢遺跡では槍先形尖頭器と細石刃・削片系石器群との関係については平面的には分離できず、積極的な共伴は肯定できなかった。しかし、槍先形尖頭器のブロック内に削片系石器群が含まれていたことは、両者を結びつける慨然性が高いと言えよう。

以上、月山沢遺跡での残された課題は他遺跡での課題でもある。とりわけ層位的に区分が困難な東北日本においては、現地での観察と資料の取扱いについては、より慎重な姿勢が求められてこよう。東北日本の細石刃～尖頭器文化については大学の卒業研究以来のテーマであり、私自身の日頃の思索や各研究者との討議が研究の発端となっている。研究を継続していく上で徐々に明らかにしていくつもりである。今後とも諸氏のご鞭撻をいただければ幸いです。

最後に、本稿を草すにあたり、山形県埋蔵文化財センター 渋谷孝雄氏・郡山女子短期大学 会田容弘氏からは研究の現状・方法等について御教示いただいた。また慶應義塾大学考古学研究室 阿部祥人先生からは、近接する上野A遺跡の資料を見せていただき、ご教示を得ることができました。合わせて感謝申し上げます。

註

- 1) 加藤 稔 1973 「東北地方の旧石器文化(後編)」『山形県立中央高等学校研究紀要3』1~28頁
加藤 稔他1982 「最上川・荒川流域の細石刃文化」『最上川』山形県総合学術調査会 768頁~819頁
加藤 稔 1989 「東北日本の細石刃核」『伊藤信雄先生追悼記念論文集』25~49頁
加藤 稔 1992 「東北日本の細石刃文化の展開」『山形県立博物館研究報告12』山形県立博物館 13頁~88頁
加藤 稔 1992 『東北日本の旧石器文化』考古学選書35 雄山閣
- 2) 石井浩幸 1993 「東北地方南部の細石刃文化」『細石刃文化研究の新たな展開』八ヶ岳旧石器研究グループ 322頁~353頁
この時点で、石井は「細石刃文化の後半には槍先形尖頭器が組成の大きな位置を占めると考える山形県月山沢遺跡や越中山遺跡では尖頭器の割合が高い。・・・後半には槍先形尖頭器が細石刃と比肩できるほど、受容の大きな位置を占めていたと考えられる。」と予察していたが、堆積層の希薄な地域では、より遺跡内での相伴関係やブロックごとの組成、母岩レベルでの検討を進めない誤解を招きかねないのご教示を受けていた。
- 3) 阿部祥人 2002 『上野A遺跡発掘調査報告書』慶應義塾大学民族考古学研究室
- 4) 加藤稔 上野秀一 1973 「東北地方における細石刃技術とその北海道との関連」『北海道考古学9』25頁~50頁 北海道考古学会
加藤・上野は、主に山形県内で発見出土している細石刃石器群を集成し、北海道で出土している細石刃核諸型式との比較から東北の細石刃核の分類を試みた。この中で月山沢遺跡から採集された細石刃関連の石器群を紹介した。資料は月山沢小中学校の校庭を整地した際に、佐藤 敬によって採集されたものである。
- 5) 佐藤正俊他 1980 『月山沢遺跡』山形県教育委員会
加藤稔他 1982 「最上川荒川流域の細石刃文化」『最上川』山形県総合学術調査会 768~819頁
加藤 稔他「お仲間林遺跡とその周辺」『最上川』745~767頁 山形県総合学術調査会
- 6) 鈴木 隆 2000 「月山沢J遺跡」『山形考古6巻2号』山形考古学会 10~40頁
- 7) 月山沢J遺跡出土の槍先形尖頭器はほとんど破損品ながら完形に近い資料には形態的に類似する。また付近からは第5図16のような槍先形尖頭器が採集されている。
- 8) 角二山遺跡や荒屋遺跡において接合資料の観察から両面調整石器の加工に伴い、得られる剥片を利用し副次的に彫刻刃や搔器を製作している状況を復元している。
東北大学文学部考古学研究室 2003 『荒屋遺跡第2次第3次発掘調査報告書』
- 9) 上野秀一 1971 「旧石器時代末葉における北海道との交流について」『山大史学4号』山形大学教育学部歴史学研究会 1~23頁
- 10) 山形県小国町湯ノ花遺跡から玉髓製の舟底形石器が採集されている。湯の花遺跡から採集された資料は県立うきたむ風土記の丘考古資料館に展示されており、黒曜石製の細石刃核が注目される。
- 11) 稲田孝司他 1996 『恩原遺跡発掘調査報告書』岡山大学考古学研究室
石材は茶褐色の頁岩で、微生物化石を含む。斑状の特殊な色合いの石材のため、母岩が共通すると判断した。
- 12) 大平山元 遺跡の報告において、三宅徹也は大平山元技法A、大平山元技法Bを設定する。大平山元技法Aは、両面調整加工石器から扇形の削片を剥取することを第一目的とし、残核となった尖頭器や彫器に整形されるもので、大平山元B技法は、両面調整加工石器から数本の削片を剥取後、途中で分割し分割面を打面として削片の剥離を進めるものである。
三宅徹也他 1981 『大平山元 遺跡』青森県郷土館
三宅徹也他 1982 『大平山元 遺跡』青森県郷土館
- 13) 栗島義明 1990 「デボの意義」『研究紀要7』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1頁~40頁
栗島義明氏はデボ遺跡を構成する石器遺物の石材・技術的特質・形態的類似に着目し、それらがどのような依存状態を示していたのか検討した。大きく2つに区分できるとし、デボ。類としては特定の器種によって構成され、しかも完成品や未成品が重なったような状態で確認されている。デボ「類は特定の石器器種を主体としながらも他の器種を伴出したり、また単一の器種構成ながら石材・技術・形態などの点で系統的に異なるものが含まれるものである。
- 14) 削片や剥片、搔器などで母岩の共有を確認したが、尖頭器の一群に削片類と同一の母岩の利用を確かめられなかった。石器の分布域(ブロック)は共有するものの、確かに組成を同じにすることはできない。
- 15) 加藤 稔 石井浩幸 1991 「越中山S'遺跡調査略報」『山形考古5巻1号』山形考古学会 12頁~21頁
- 16) 山口博之 1990 「山寺 所部遺跡出土の旧石器」『山形考古』3巻3号 山形考古学会 40頁~45頁
- 17) 横山裕平 1994 『大平山元 遺跡第2次発掘調査報告書』蟹田町教育委員会
大平山元 遺跡の2次調査(横山裕平1992)では、第文化層調査結果から有樋尖頭器と削片系細石刃石器群が共存することが明らかになった。細石刃石器群は明確な湧別技法による細石刃核ブランクとピリカ型に類するものがある。
- 18) 斎藤典芳 1993 『鴨子台遺跡発掘調査報告書』秋田県埋蔵文化財センター
菅原俊行・石川恵美子 1993 「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書」秋田市教育委員会
- 19) 西村博幸他 1995 『学壇遺跡群 南福島ニュータウン埋蔵文化財発掘調査報告』福島市埋蔵文化財報告書 第67集
- 20) 吉井雅勇 1998 「北方系細石刃石器群」『新潟県考古学談話会』20 新潟考古学談話会
- 21) 立木宏明 1996 『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告 樽口遺跡』新潟県朝日村教育委員会
立木宏明 2003 「中部地方北部地域の細石刃文化」『シンポジウム 日本の細石刃文化』八ヶ岳旧石器研究グループ
立木宏明(2003)は、樽口遺跡A-M S文化層では白滝型の細石刃核にホロカ型の細石刃核が加わり、一連の製作技術で製作されるという。A-M H文化層はホロカ型の細石刃核と大型の削器・搔器・尖頭器の組み合わせで、青森県大平山元 遺跡などの組成に類似し、新しい要素と捉えている。ま

- た、白滝型細石刃核を持つ石器群は客体的で、珪質頁岩の薄片系細石刃核とホロカ型が主体的であるとする。
- 22) 川口 潤他1993 『白草遺跡・北篠場遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 23) 石器文化研究会編 1997 『第4回 石器文化研究交流会 要旨』
 テーマ発表「古利根川以東の北方系細石刃石器群」において、関東各県から出土している北方系細石刃石器群の状況を明らかにするとともに分布の背景や編年的な位置について討論された。古利根川以東では、現在約40箇所の関連する遺跡が確認されているが、今後さらに増えていくものと思われる。
- 24) 萩谷千明 2003 「北関東の細石刃文化」『シンポジウム 日本の細石刃文化』ハケ岳旧石器研究グループ
- 25) 南関東、特に相模野台地を主なフィールドとして伊藤恒彦 砂田佳弘 諏 訪問順 島立 桂 永塚俊司らによって積極的に細石刃文化に係る様々な研究が推し進められている。
 砂田佳弘 1993「細石器の出現」『細石刃文化研究の新たな展開』佐久考古学会 ハケ岳旧石器研究グループ 21頁～59頁
 諏訪問 順 1993「相模野台地における細石刃石器群と尖頭器」『細石刃文化研究の新たな展開』佐久考古学会 ハケ岳旧石器研究グループ 67頁～74頁
 島立 桂 1993「細石刃と槍先形尖頭器の併存とその意味」『細石刃文化研究の新たな展開』佐久考古学会 ハケ岳旧石器研究グループ 64頁～66頁
 永塚俊司 2003「南関東地域の細石刃文化」『シンポジウム 日本の細石刃文化』ハケ岳旧石器研究グループ
 野口 淳 2003「細石刃石器群の遺跡形成過程」『シンポジウム 日本の細石刃文化』ハケ岳旧石器研究グループ
 仲田大人 2003「細石刃石器群の技術とその背景・素描」『シンポジウム 日本の細石刃文化』ハケ岳旧石器研究グループ
- 26) 永塚俊司 1996「細石刃生産システムとその工程分割・遺跡間連鎖」『中ツ原第1遺跡G地点の研究』139頁～157頁 ハケ岳旧石器研究グループ
 堤 隆 1996「削片系細石刃石器群をめぐる技術的組織の異相」『古代』102号 早稲田大学考古学会
 加藤博文 1996「モービルツールとしての両面加工石器」『考古学雑談』西野 元先生退官記念論文集 26頁～44頁 西野 元先生退官記念会
 長沼正樹 2002「両面調整石器群研究序説」『考古学研究』第49巻第3号 考古学研究会
- 27) 石井浩幸 1991「弓張平B遺跡(第2文化層)出土の有舌尖頭器」『東北文化論のための先史学歴史学論集』493頁～513頁 加藤稔先生還暦記念会編
 石井浩幸 2001「高瀬山遺跡D地区における旧石器ブロックの調査」『山形考古』7巻1号 山形考古学会
 石井浩幸 2002「弓張平B遺跡の槍先形尖頭器」『西村山の歴史と文化』西村山地域史研究会
 東北横断自動車道酒田線建設に伴う西川町山居遺跡・高松遺跡の発掘資料には多数の尖頭器を始めとする石器群が得られている。特に山居遺跡からは形態的と製作段階的にも多様な種類の尖頭器が出土し、生産地遺跡の様相がある。
- 28) 氏家信行他 1998 『高松・遺跡発掘調査報告書』(財)山形県埋蔵文化財センター
 氏家信行他 1997 『山居遺跡発掘調査報告書』(財)山形県埋蔵文化財センター
- 29) 阿部祥人 1997 「上野A遺跡」『第11回東北の旧石器文化を語る会資料集』
 阿部祥人他 1998 『上野A遺跡発掘調査概報』慶應義塾大学考古学研究室編
 阿部祥人他 2002 『上野A遺跡発掘調査報告書』慶應義塾大学考古学研究室編
 阿部祥人先生のご好意により慶應義塾大学考古学研究室にて、上野A遺跡出土資料を観察する機会を得、接合資料などについて検討することができた。上野A遺跡では小範囲の調査区ながら数万点の上る石器類が出土した。大半は槍先形尖頭器の製作にかかわる剥片群で、大平山元 遺跡に類似するイメージを受けた。
- 30) 伊藤恒彦 1989 「細石刃石器群の成立と尖頭器石器群の関連について」『長野県考古学会誌59・60』294頁～298頁
 砂田佳弘 1993 「細石器の出現」『細石刃文化研究の新たな展開』佐久考古学会ハケ岳旧石器研究グループ
 砂田佳弘 1988 「相模野の細石器」『神奈川考古 24』31頁～64頁 神奈川考古同人会
 諏訪問 順 1993 「相模野台地における細石刃石器群と尖頭器」『細石刃文化研究の新たな展開』佐久考古学会 ハケ岳旧石器研究グループ 67頁～74頁
 島立 桂 1993 「細石刃と槍先形尖頭器の併存とその意味」『細石刃文化研究の新たな展開』佐久考古学会 ハケ岳旧石器研究グループ 64頁～66頁
 島立 桂 1993 「相模野台地における槍先形尖頭器と細石刃の展開」『潮見 浩先生退官記念論集』61頁～76頁
 鈴木次郎 1989 「槍先形尖頭器石器群と細石刃石器群の時間的關係」『長野県考古学会誌59・60』294頁～298頁
 堤 隆 1991 「相模野細石刃文化における石器装備の構造」『大和市史研究 17』1頁～32頁 大和市
 砂田佳弘 2003 「相模野細石器研究のこれから」『考古学論叢 神奈川』第11集 175頁～177頁 神奈川県考古学会
 白石浩之 2003 「相模野台地における旧石器時代の成果と課題」『考古学論叢 神奈川』第11集 神奈川県考古学会
- 31) 佐藤宏之 1992 「北方系石器群と定住化仮説」『法政大学大学院紀要』第29号 法政大学
 加藤博文 1996 「モービルツールとしての両面加工石器」『考古学雑談』西野 元先生退官記念論文集 26頁～44頁 西野 元先生退官記念会
 佐野勝宏 2002 「北方系細石刃石器群を残した人類の行動形態」『考古学研究』第49巻第1号 考古学研究会



写真1 月山沢遺跡の遠景 ↑ S



写真2 月山沢遺跡調査区全景 ↑ SW



写真3 月山沢遺跡調査区全景 ↑ N



写真4 遺物出土状況 ↑ S



写真5 槍先形尖頭器の出土状況 Bブロック



写真6 槍先形尖頭器の出土状況 Bブロック



写真7 槍先形尖頭器と石核の出土状況



写真8 搖器出土状況 (腹面)

